

私の生活に欠かせないもの。それはパスタ、オリーブ、コーヒー、チョコレート&スイーツ。日本生まれで日本育ちの日本人なのに、どういふわけか和物が苦手で、日本人好みに変換されたものは胃袋が「これを消化するんですか？」と労働を拒否する。日本人が梅干を食べるが如くトスカーナのオリーブを習慣的につまみ、コーヒーはドイツ、代用はイタリア。日本のコーヒーは香りだけが素晴らしい。スイーツはというと日本人好みに牛乳で薄めたクリームと口の中で溶ける空気のようなスポンジが胃袋に一步入った途端、食道のドアが閉まって手からフォークがパタリと落ちる。日本のチョコレートも水っぽい。これは貿易上カカオ輸入の優先順位が低いせいかな？因みにワインは1位イタリア、2位フランス。さて、パスタはというと小学校の給食でミートソースに出会って以来スパゲッティの虜—その後ラグー・アッラ・ボロニーゼ(ボロネーゼ)に乗り換えたが、特にバジリコが好き。ニョッキ、ラビオリ、ラザーニェ、冬場はグラタンやドリアをよく食べる。そんな具合であるから干ばつで「小麦が採れない」ニュースには肝を冷やした。というのも私の舌は白いご飯が大好きなのだが、胃袋の方が苦手なのである。あるとき食後眠気に襲われたので気がついた。ご飯を食べると眠くなる。というわけで特別頭を使う前の軽食はパンかパスタにしている。

そこでパスタにおけるアル・デンテ。これまた悩みの種。確かに出てくるときはアル・デンテなのだけれど、日本人の繊細感覚による究極のアル・デンテである上に麺が細いから食べているうちに「皿うどん」ならず「皿そば」と化す。いくら朝昼晩各10分の味気ない日常食生活を送っている私といえども3分で食べる技能はない。そこでまた胃袋様のご機嫌を損ねないように店の選択が必要となる。自分で作る時は硬さを保つために煮えたつお湯に塩をドバツと入れるものだから間欠泉並みの湯気が上がる。弾力のないパスタはパスタにあらず。パスタにもリゾットにも「芯」が要る。

さて、食べ物のお話をすると際限なく別方向へ発展しそうなので、ここで歌の話に移ろう。私はシャルル・アズナヴァールの「ラ・ボエーム」を聴くたびに「カフェ・クレーム」の歌詞に耳がそばだつ。ウィーンで日本人観光客の定番「アインシュペナー」に一人逆らって「モッカ(ブラックコーヒー)」と言い張り、しぶしぶ出してもらった私ではあるが、好みに関わらず私の場合には飲食物が妙に印象深く、言葉と映像が相互に連結する。そこで気になっていながら放置していた「イタリアーノ(L'ITALIANO)」の中の「スパゲッティ・アル・デンテ」という歌詞。この前の忘年会のスパゲッティが好みの硬さだったお蔭で意識に浮上した。手持ちのCDでパトリツィオ・ブアンネが軽快に歌っているが、この歌は1983年にトト・クトゥーニョがサンレモ音楽祭で歌って有名になった歌だそう。著作権の問題か構成の問題かリーフレットには未掲載だったが、歌詞を調べてみると見事な韻の踏み方に驚く。そして一見楽しそうなリズムの中にある食欲をそそる言葉は決して「おいしいぞ〜」という単純なものではない。イタリアという国の賛歌であった。「ラ・ボエーム」では貧しい芸術家の疲れを癒し心を温める一杯のコーヒー。「イタリアーノ」では自国らしさが誇れるスパゲッティ・アル・デンテ。それぞれが生活を豊かにする糧だ。たとえ日本といえども、人の心を潤す社会を作る政治だけは料理に準ぜず「皿そば」にならないしっかりした「芯」と、苦難を跳ね返す「弾力」のあるアル・デンテであってほしいと願う。(2012.12.15)